

Kodak  
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

生花奥様抄

79  
4038  
2

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24



門 79  
號 4038  
卷 2



東向花の辰

之例

○むろし向せ正月花よ名付の事君の記る乃  
一書よ由するの由よ有る思ふ  
○この花の向したるを中行事節令の由花と  
する祝事と花をの傳を以て月々の其の花と  
圖寸この乃秘事明きも中行事節の花と

昭和十六年一月十一日寄  
尼野貴英氏贈



つふを何と問ひある人も何事ハ切めて門社の  
 ためもに傳承の他例を以て 予らみよとくや  
 口授の花形を因せり二の花名の傳は亦して傳事  
 にお傳せし花の何したも分た花をりとして亦  
 さし<sup>スナホ</sup>種質から種をあらを花を<sup>スナホ</sup>取上道明さハ  
 志<sup>スナホ</sup>と伝承よおりの人を花の何したの目さま  
 へのをしこいさる一

○年中十二月の和名をみお人の志る本又形意とも花名  
 の傳を志るためよ月々の傳名を志るせり  
 ○年中月々の節會伝をかく祝する人のためよ其来由  
 をや川ゆりしそ又花名の傳よよらる也  
 ○花名形傳よよりて月々よ用ゆらまの花をゆ  
 る各たる花を以て人よりてあすを世の常とせし  
 用ゆらるるをよ月々のまの花をせしる一



○花乃の身白と云ふさまハ却童の花と教ふも似たり  
よつて松月並古流の傳來五辨五行規おの神母川  
先哲のつゝと花と教ふ人のマ語へよあるをり

花道傳來軌おの因由

○生花の軌おのいふよりありとてとも流流も遠く  
よして中右の他為と云ふと心得古人の定法の規矩

と用ゆる人少し今の世の人通例の規おの辨へて  
して草木の深あをま生こ心得る人多く漏ここして  
換索すんのみ胡ナシ為たまを志るを坊人千草万本  
天性の理も協もるるを是とすりまたるる昔ソノカミ日  
濫去和尚を晨旦国唐土より日本渡り南都東大  
鼻は土地の匂ひを鼻じて地名を名つけ草木の  
匂ひを鼻じて草木の名を名つけめりて此類は



ありて律宗を弘めたり傳（如彼新羅和宗の帝親山  
 靈山寺をひきき傳律の戒壇を建立し一の山を  
 去て靈山の白ひ山をひきて帝釋天と安坐し帝  
 親山靈山寺にありて南都東大寺におきてを  
 天平勝 上皇御願よりて戒壇院を建立しきり  
 宝年中 戒律の法を弘めりひねる事の本願を成し  
 少鼻より白ひと鼻をさるる佛法信者の記念し

一花一葉仇よりなりて天ユの白ひを考へたり  
 花よりてを花血は盛成るる川流じり花の物語を  
 たりてを宝瓶よりなりて意味は四よりなり  
 應身 佛塔より信よりなり又和國より本尊なり  
 化身 佛塔より信よりなり又和國より本尊なり  
 何れも心よりなりて名を考へりなりて上皇の  
 勅をうけて鼻より白ひと鼻をさるる功徳を  
 紀しなりなりと信よりなりて本尊の事本悉くみり



信陽立行の自ひみちなりこ四の草本の花を  
 中よりさまの護令信を南都住 中よりこの信  
 と世を傳へんとす也て相形を定てなるものを  
 形を正合成短の字の字辨よりあり四力を以て  
 主令補佐と名つけ四辨の規矩を定め草本の  
 おしよ應了ておと然しゆの柵尾山明也と人を  
 正に令通用作るこ花辨と配當して中流を教ひ

ぬいぬい風美ハ護令の四辨を五辨と記して五  
 大の形をせむたるなりこ二流世は流布すこ  
 も本系と識たり人をせゆなりこ後松月寺敷き  
南都西大寺中真山城園中法橋寺  
の園基なり 真正菩薩と稱すなり 護令明也二流  
 を令して草本のおしよを記しゆありまて花を朋  
 こしゆありこ是は第一流也先師宣柳也より  
 松月寺の信を更て古流と名つけ世は流布しゆ



之三平流を汲て花乃の耳味をたしむしこ  
り今く古美をちり研も杉を用ひ寸不業と  
單正のり花よ智中と心と日花朝名あまを  
信しあ水六下酒のり少川五月一歳居全口語  
とうけてこの傳束を記するこ後世の門社杉を  
用て居をもうる魚う寸

○め約傳束を何人の集りたる規案こつあとも

あす唯古流こころり美(こころ)まよく花門社の  
たのよも流とあす花乃の傳由とあす

○生花鑑籙の事をも一歳居士著述の甲陽百瓶四季  
百瓶よ荒坊を記せりこ國傳束天世乃花乃をい  
の事居士の遠傳をこ浪花壱齡刺あ来生花  
故実集よ編りたりこのじうし命を鑑籙の事  
と雲守之國よわたり花を敬ふととあんとあり



故実集とてしつてみる也

年中月々の倭名並に節令乃其由

附花鳥の傳を以て其の形をせしむ事

○正月を正月といふ清淵の奥義抄に云ふ正月三年の  
えしめらるる親類互に祀事とのへむりましく  
すらふらりて睦月といふ又朔日を元日といひ之始

八十 (十二)

こいつを一年のえしめの日形らるる也之を大納言  
殿朝卿の考よつと玉のうへも月日もあきうら  
みけのえしめのころを其まかりこよみかへるもは  
こゝろなる

○今の元日の祀事を考ふと其を漢のちる祖より  
大抵の日かまを祀武天皇東征しゆひ天下素平  
りして正月元日即位すしくて王道乃其基とてしめ



正月の祓事と云ふは、あまのさかひの神皇八今の正月の祓事  
 を原土の例と云ふたると、あまのさかひ神武元年、八咫神  
 周の惠王十三年、あまたるの漢の代より、西暦十一年  
 己亥の年、又元日を吉祥日と名つけて、そのころ、あまの  
 神皇と云ふこと、あまのさかひ神皇を、あまのさかひ神皇と  
 云ふこと、あまのさかひ神皇を、あまのさかひ神皇と云ふこと、  
 神皇八今の正月の祓事を、神武帝より始る事、是れ、あまの  
 〇倭國の風、その方より、あまのさかひ神皇を、あまのさかひ

葦原山に名つけて、元日は、祓事、葦原山を、海中から  
 仙卿ふまへ、あまのさかひ神皇を、名つけて、祓事、あまのさかひ神皇  
 盤と云ひ、あまのさかひ神皇と云ふこと、又、難者、あまのさかひ神皇  
 を、あまのさかひ神皇と云ふこと、あまのさかひ神皇と云ふこと、  
 あまのさかひ神皇と云ふこと、  
 〇元日より、十五日、あまのさかひ神皇と云ふこと、あまのさかひ神皇と云ふこと、  
 あまのさかひ神皇と云ふこと、あまのさかひ神皇と云ふこと、あまのさかひ神皇と云ふこと、







糸をくいとけて中宗き

朝霞みまのしの

柳うねりまを

長ありのを

声



牡丹舎

二月衣更にひよの月餅をさうかたけ、文子衣とさうを

八十  
十五

いよは付てさねささきとつと、眞美抄をみたり、あ

月を陰陽変る月形ま八嫁を婚禮よみ終るを月之

周禮よ仲を男女舎せしむとみたり

○十五日涅槃にひよ親迦佛入滅し、あ月之にひよ傳ふ

ま、あ周乃穆王五十二年佛涅槃すとあ周の世よ

あ月とあ月よ用也ま、二月にひよを今日午の十二月

よあたる之指代のかさうたるを考へ、すし、あ二月に

八十  
十六







三日を上巳といふ。一は上乃己乃日を用ひたり  
魏より後之日を用ひる。この日草の餅をばひ。桃  
花の酒を呑む。と邪を除去する病を去るの  
祓事。中花の書あり。二月之日麻糰草の汁を揉り  
て龍台<sup>フセツカン</sup>料を依り食す。此邪を去る。と云う  
古草の餅の事。周の函王の所より傳はむ。こ  
の事。一を云く。此草を用ひたり。國史も田野も

八十 (十七)

草の母子草と名付。二月之日婦女あまを揉りてむ。  
り。よす。このま。日か。ても母子草を用ひたり。  
みたり。今を蓬を用ひる。又この日女子雛<sup>ヒナ</sup>抱む。  
す。く。とも。中。の。災。を。去。る。よ。た。め。之。日。を。  
辰の月を己巳と除目。て不祥を除く。禊<sup>ハラヒ</sup>む。  
とて。す。る。事。之。を。禊。む。の。を。紙。を。人。形。を。依。る。  
あまを雛<sup>ヒナ</sup>と名付。又母子ともいふ。あの人形を母に



子に力を分てくぬ思て何しき事をとくひする  
 今雛の雛ひをあまを赤くたる之男女の紙雛を  
 用ひるを陰陽和順を放する之源氏物語をよま  
 ぶ余る人をこの雛ひを替ねて何事にも當代を出入  
 ぬもするにむすひの事明きハ小ひくをかけるま  
 一と事明る極一

以上上巳の節舎よ花をけりるを春の柳にて

八十(六)

柳をけりる又を柳花をけりるす一又は月條時  
 宴来就走よけりる花を花多の傳を以て春の  
 花をけり一  
 一と事明る極一  
 一と事明る極一  
 一と事明る極一  
 一と事明る極一



和光庵



すけは是溪野系乃流乃山川くしけを崔凡  
山乃くもく重月

○四月卯月三日奥美抄云卯のくも重月よひく  
也卯のくも月三日之朔日と云之くも公家方のみ  
日より山川乃將來末と云くもく下々もても重月  
准する也

○八日灌佛のく親迦尊誕生くもく日即是八花芽

八十(十九)

こそ竹乃竿よつしの花を付てふくもくもくも  
もを佛像よ香もをたぐも沐浴する之唐ま乃  
の代と考つるも周の昭王二十四年四月八日親迦佛  
生るてこそを周の代もを重月と云月こくもくも今  
月廿の二月八日よ何たるは只四月こくもくもく日  
を用ひたるゆゑ今今日甚中も灌佛のくも  
の月首復こくもくもくもて放事ゆ



灌佛ニ付て花を供する暇も天上天下唯我独  
 尊のみならず海も憍む清淨の工修らるゝを以て花を  
 献し灌佛すべし又この月花を生ず客答食應  
 すのころを卵の花を生ずし花をの供を以て花を  
 をまのたふとひつて  
 みのつけし梅をりやを庭たてつゝまを隣  
 よきりらう持しふ

八十  
 (三)

かしきも古声をりし鳴りしよ  
 山ゆきき原



百善園

○昔この月を田を植る月也ナク早苗月といふ眞実物  
 よみたり五日と増年といふ増をたしめ之五月年の



月明きなりしめの年よあたる日と移す楚の屈平  
湘羅に沈みしも昔月明りしとこの日糝を夜  
ふくしを屈平と名する遺風といひ傳ふ所の唐  
土の半平よみたり又吳説は糝を巨且う糝を糝  
糝を糝と云ふを信す愈う守糝刀と云は  
陰陽相包みて教ふ所のよもあたるこの月ハ一信  
せする月明る魚あまを移す又この日遠く高蒲

を郭より酒よしたそのみ枕を擱て以移す  
とてやよつけみすしと擱るみかあまを糝と  
たの川祝事之又この日男子ある家のみを糝と云  
由人形と云高蒲刀とてと刀ありとあるを山抜國  
庭森の糸うと云似たる事なり一平良親王吳  
國凶賊と退治しし古例と移すし也  
以上堀平の節命をせするを高蒲は花高蒲



せびて守る事五節の傳みたり又この月  
 徳内實客を得たる此走りを楳をよし一花  
 きの傳を以て答應するまの花のしるし一花  
 楳をせしむるまの此は花高満をせしむる  
 この月のまの花のしるし一花をめの傳よする  
 多しは花高満を用申りあり

みるるの月の秘傳を以てよするま

すくくく自よたちるま

楳の戸を

ふりかへり

たかくとまハ

しそ朝よつなめの

自よつなめの

○青きまの月とつな暑年のま一たは泉がま川



一壇堂



さる也かいつ也朔日と水乃朔日と云々一徳國  
水室より其中一水とあり一由一この日水餅を後  
も主例二の月晦日は由一おてまゝむすりと云月  
たもむも水乃月とむも又水餅乃とむも云々  
一海の半水は水神とまゝむもむも水乃荒初被  
注も水乃也 其中よりまゝ一まゝ一と云水乃也  
と云々一 拾遺集の身は 水乃月との水餅の云々む

する人をもと世の命の中と云々あり 後拾遺集  
乃身よありと云々水乃月と移して麻乃糸とまゝ  
まゝりてもたゝむすりと云々 水の音と水乃也  
する也との云々と云々ては由一まゝむすりと云々  
事ハ人部と云々一

この月字一徳國の水室より水と其中一まゝ一  
例まゝて朔日は水餅を後と云々也あまも五節の



卯之始まるとも朔日の夜ひ晦日のみせきま付てせ  
 花をすらぬくハ別傳の事ゆゑ一又この月始ま  
 せ得て空を雁するままの花を生る時ハ花を  
 傳を以てナラシコ 観佳夏の花をする  
 ときを此走の花と

心 草中



一陽軒

八十 (三)

去り舟中の明ししを月かけをわけし何事

けりあまのたす鶴川の軍と瀬を

みづる

ゆをわけ座す紀みゆりさのち

○七月を新月といふ事ゆゑと云ふ事ゆゑと云ふ事ゆゑ  
 遠く月形も魚を付く七日と七夕とも同く云ふ事  
 といふ事ゆゑと云ふ事ゆゑと云ふ事ゆゑと云ふ事ゆゑ  
 といふ事ゆゑと云ふ事ゆゑと云ふ事ゆゑと云ふ事ゆゑ



昔は五毛の糸をつけてきけるものなり或は瓜蒞子  
多しをば懸て何れも預とかけらるる事預に  
加ふて成物すと云ふ事とん功真といふ事あり  
を成武帝ありきする之のおたはあまを八  
てほくのけそ針のみすよ糸を通したるもの  
預の叶なる一ひさしよふのしを漢の世に始り  
二日かまそを天平勝安七年のりきしする事也

八十 (三五)

又行もろく二廿相國史にもある一くも傳式を下と  
も男女とも梶の葉を結りて身印の事といふ  
日素懸を祝つたといふ事氏のみ日又死して足形  
鬼神に成世の人を瘡を<sup>ツラ</sup>懸す一むは鬼神に素懸  
を祈る瘡を刀をこし二之も例よりして素懸を祝  
婦し形を二一瘡を祈るもつた方なり一  
○十五日盂蘭盆の事目連の母地獄におちると供養



たるより始る十四日イキニ生タカ見タカ靈タカの祀ひこそお親あつた  
 多利徳蓮の飯親あつた一語りて祀ふとす先  
 の礼もお親あつた人を十四日よするあり

以上七夕元元の祝事元は故実元は七夕をみる花を  
 昔の傳元はみく女竹男竹おま元は守願元の系  
 を掛元としたりとの故実元はみく方婚礼  
 にも守る事可元は若牛元の形元は上段元の間元の中央元

け雌蝶雄蝶の若柄の薨元子を飾りてま元或元ま元一元又  
 縁飾元は客元は食元は應元の形元は花元は多元の傳元を以元て女元前元花  
 をせ元て一元は月元のま元の花  
 して祀元走元は成元屋元一  
 宿元形元はハ元の  
 名元はま元はみ元は  
 一元は句元は野元田元を祀元て元は元も



徳保窓



つくしりの秋とあきうて侍りたりおを彫り  
婦りるかしこまのちり

○八月と慈月と云ふ奥更抄にみたり朔日と八朔と  
云ふ又頼の朔日にもゆゆ秋の田の定形を主人が  
徳りたのゆゆと意味よるゆゆの八朔の事人皇八  
十代後凉草院の建を年中よりちりまると  
この月八朔の事唐土の例より十日すて後凉草

院の渡ありたりまらまらして丑節の式の外に  
の事この月廣客食雁子りりそ花きの侍り  
秋の花を生る一葉を  
花の秋の心年を  
花の心年を  
花の心年を  
秋の花を生るを



如玉堂



此是乃花と云ふ也一 分花けハ川也  
一 宿をそつささるるあやしの物なぬるし 秋風  
秋風はささるるあやしの物なぬるし 丁卯年也

川一りりつを唱へるあやかり

○九月を月といふお潮せき也お正月といふと正月  
といふと奥を折よみたり九日と重陽といふ月も日也  
陽を重たならぬこの日菊花の宴にて葉の

花を酒よりあてのめハ不祥を際さきあせうる  
こめり彭祖といふ仙人葉花の宴をそつささるる  
たゆより起りて禁中より重陽の宴へ行そつささるる  
この日乃祝事抄物よみたり

以上の重陽の祝事を葉花の宴といふより  
祝すの事之葉の花をそつささるる事五節の物といふ  
うみ一この月客まの馳走を尾をかせさるるこ



花名の傳よりて美観すも其名の花といふ  
 尤艶麗なる花は小きく分ちてきよ下

かく人を招くこ

みして以て

以て尾花

袖をすめり

秋風よ人も草も初生をめで



青嶂庵

八十 (三九)

何處一もまぢようつり

○十月を神月といふは古く乃神書その大社初め  
 て餘國は神也友は各つくに奥美抄みたり又  
 月伊弉册<sup>イワナキ</sup>月御り月御は神也といふ  
 又この月まの日は承のよと又玄徳も以て祝  
 儀を食すは屋まを除くと之女子を指たり人  
 一入りの日と祝ふ事越まるとこの日おの國を治



の神々諸人の縁を結ぶゆゑに女子を扶たる人二  
福をくくつて用ひかた

この月廿五日にツクサは付て祝事ありしはまは客  
は食座すゝるを殊業とせして飛走するの二殊業の  
おを廻てもうけしをねむを賞報してある  
とこの月の高の花とツクサ

葉のふかふかむをのめる年と如 おを廻すも

山を眺る舞

夕月初けおまひ

田舎の声を

しそめおは

のあまら山塔



雲龍閣

○十月を霜月といふはつとさよハおやり月といふはこの月  
髪を梳かすかたはあ脇あ元服をすむは月



一陽来復の月明るを祝して用ひたる程子の易傳  
 も陽を以て生じて甚微少靜而後長寸の何まハ  
 一陽来復の月明るを祝して一陽来復の傳を以て柳を  
 するなり

一陽来復の月明るを祝するの式は此の如し  
 の外之若花を生じて祝するなりハ何れもその如し  
 一陽来復の傳を以て柳を生

一又祝事より月にて外客食應の花を以て

一陽来復の傳を以て枇杷の花を生じて

一陽来復の傳を以て

一陽来復の月明る

一陽来復の傳を以て

一陽来復の傳を以て

一陽来復の傳を以て



九皋樓



あを深くかもの川瀬よ鳴るる

五月月乃かけおしむり

○十二月を師走といふこの月僧徒佛名念を執りする  
よけて師走といふ之奥美抄よみたり

○晦日を俗よ大歳といふこの日の終りゆき六部奉を祝し  
至八父母を親し祝事をのべぬ五月の祝事  
といふと形も大とていふ

○常分を年越といふは黄豆をたて福内鬼外とて  
声よこして悪鬼をくくると追催ともおぼゆる  
ともいふ也源氏物語よる屋よこの頃もこの事なり  
其中よも行らる事よて文武天皇よや三年よ始  
まらこの日戦又禰のかしらをさして門戸は括也  
悪鬼を除くまし明をむりしをふりしを用ひた  
る也又この日は陰よまらるたりふひを夜下よ



安んじしをさるをけしは是を川(西守)ここの  
 多子(多)獲の字を書きし也(所)く(古)来の風俗也  
 是も一年の常日祝事なり也(所)く(也)し(後)  
 を用ひて祝す也(所)く(也)福を増し(所)く(也)災と(所)く(也)祈る  
 祝事之(所)く(也)

この月を一月の終り(所)く(也)祝事(所)く(也)なり(所)く(也)

應を(所)く(也)勿論(所)く(也)の事(所)く(也)なり(所)く(也)

梅(所)く(也)なり(所)く(也)

さ(所)く(也)る(所)く(也)

さ(所)く(也)る(所)く(也)

心(所)く(也)を(所)く(也)



一得舟



引も終してせし方のうをけよと並ぶを

つらふ底のうけの地を

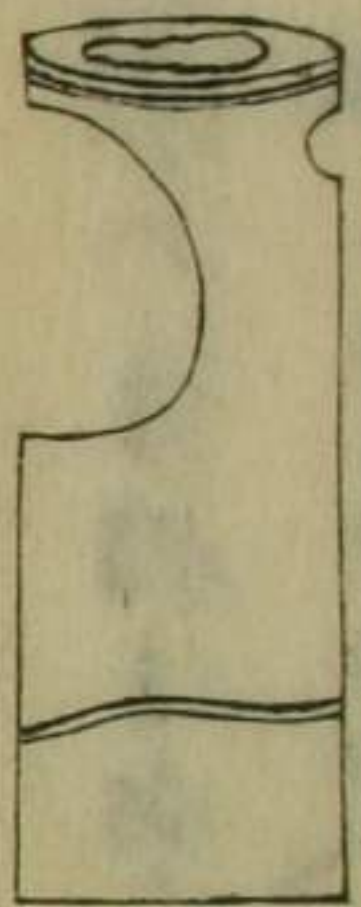
○花巻の傳を以て生得もたら花園草稿に交換  
写するや一旦の傳花を神事と納するに之  
拂を生幣帛を掛ると神事の生方はお祓祇  
の巻よみたり執公の草紙を以奥と稱す

追加

○花巻ツルの舊首ツルのひみもツルを磨ツルの切方ありて  
けあよいつまもみかき打を見合よとたたる由形  
定し寸帯を二十寸京流のあみ寸帯の物を用  
ひす紐々を刺舊首に廣の寸帯を二あみたる人を  
て二十六寸の寸帯よりあみ打を用ひたるよ  
こ形千俵よりたる由形と又寫し並ぶの也



達磨



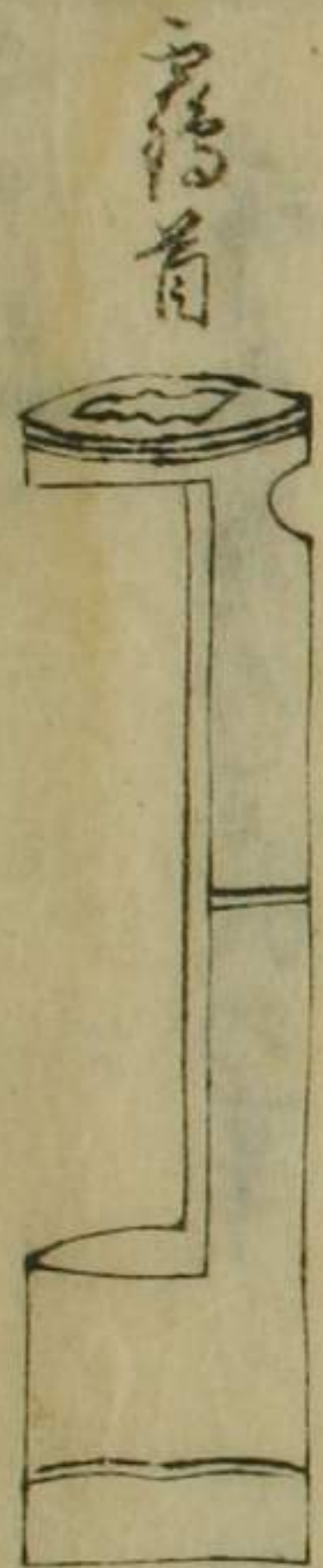
○是を獅子口の通りやす  
 して太サ丈も一尺二是  
 を獅子口の通りや割こ

○月の輪は管を止めたるをよこす

○はを月の輪と除に丈を二ツは割一ツ分はと定めは  
 六八の寸を以てそのへるや太サは二割て二ツ分欠きて  
 是又四六八の寸を以て伸屈めするや

ツキ 四七

○口のくろ線 upper 月の輪を一寸内へて奥を深く下  
 を一寸五分内へて奥を浅くくくや 格好は  
 此より  
 行定を月の輪をかきうま明る



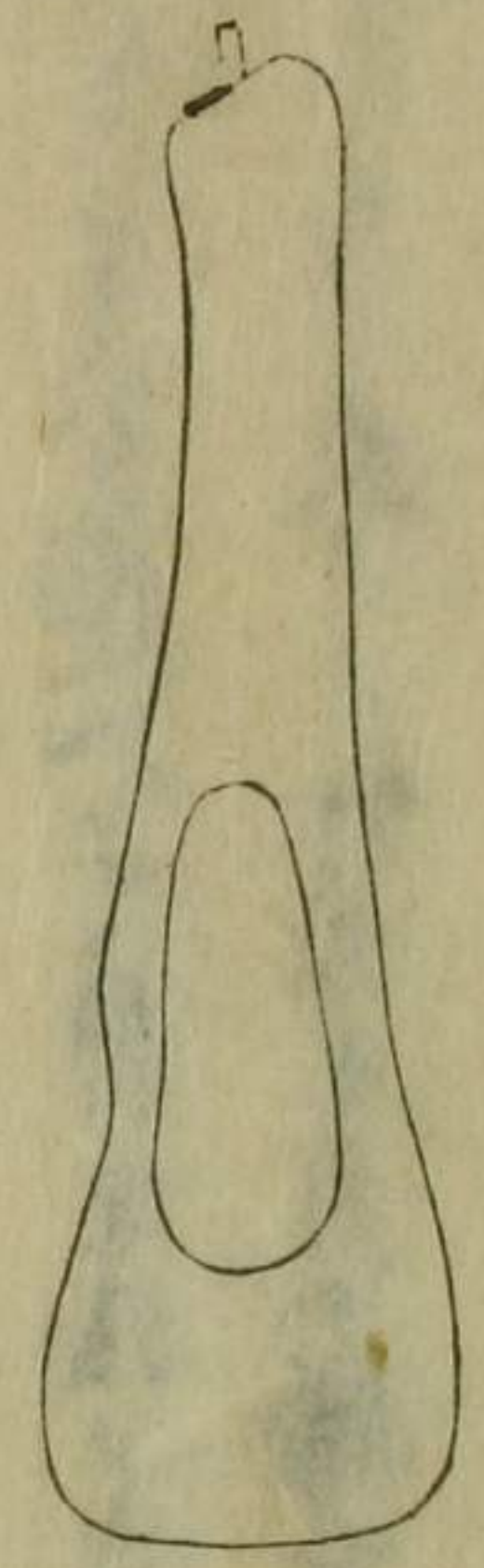
○是を二尺五寸  
 一尺七寸を寸と

してはを太サを獅子口の通り四ツは割一ツ分は  
 分欠く丈を月の輪を除に四ツは割一ツ分は



分欠甲とすりの指好見合四六八の寸を以て居伸  
 して子縁一尺又修二一 訂定月輪と加さうよ  
 つけらや

婦を産の寸法の事



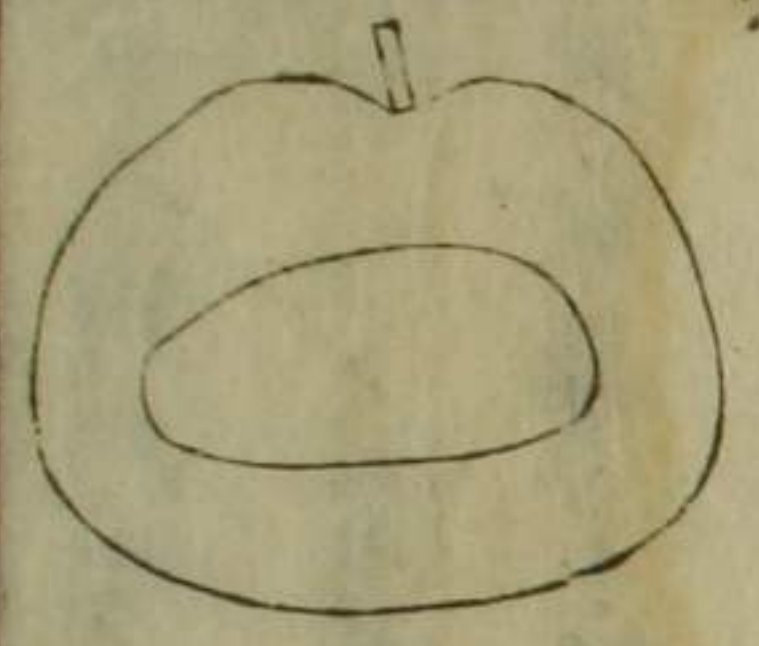
分欠とすりのよの寸法を又二つは割一ツ分を寸

○圓の寸法を以て

を丈とすは割一ツ

ツキ 哭

の寸割の下の一ツの圓(下ル)太サも二ツ割一ツ分  
 の寸の下の一ツの割の丸をききまを以つて割一ツ分  
 又を二ツ割一ツ分とすりや圓式を以て指好を  
 見合居伸四六八を以てす。掛汗の産を以て  
 うー以 柳子口の月の輪よあると二つは  
 つけらや



○圓の寸法を以て



中の割の一寸分を甲とす丸すをニ寸割一寸分を乙割  
 ニ寸分を丙割とす或は甲乙丙丁とす或は甲乙丙丁  
 凡合を一訂定とす又まうしは又明るし  
 以上少く多の寸法二十六本の内又甲一乙一丙一丁一  
 在世の時次第に富きくまうしは又まうしは又明るし  
 とは是れより多し平々門社のためにもと写し  
 並にこの形り

ツキ 四九 終

諸國會頭如左

京師	一方軒一甫
江戸	是心軒一調
泉列塙	桃李園止乙
紀列和哥府	喜見堂雨竹
江列石道邑	詠歸堂五人
勢列洞津	臨江亭指月



同列洞津

尾列名古屋

羊列吉田府

遠列笠井村

加列金沢府

以上

百宣亭梅只

竹林軒理條

心泰齊梅楚

庵葉軒百列

百花園卜芝

ツキ 罌



